**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第２６回　（２０１６年　６月１４日）**

**・第２６回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」５～６頁**

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁上段１０～１１

***Mの二度目のシュリー・ラーマクリシュナ訪問は朝八時、東南のベランダだった。床屋がきて、師はってもらおうとしておられた。***

(解説)

インドでは昔、床屋さんは個人の家に行きました。今でも僧院では床屋さんが来てお坊さんの髪を剃っています。そのような感じでドッキネッショルにも床屋さんが来ていたのです。

みなさん、タクールの写真を見ると、ひげがありますね。

どうして床屋さんがドッキネッショルに来ているのに、タクールにはひげがあったのか分かりますか？なぜなら、

**タクールの肌はとてもソフトでデリケートでした。赤ちゃんよりも柔らかく、まるでバターのようでした。**

バターをイメージしてみてください。

それほどタクールの肌はソフトだったので、カミソリで剃ることができませんでした。だからひげをはさみでclipping、切りそろえていたのです。

タクールは身体全部がバターのようにソフトでしたから、たくさん歩くこともできませんでした。シュリ―・チャイタンニャはあちこちに歩いて行って皆さんに教えていましたね。例えば、ベンガルからベナレス、プリ、といつも歩いていました。たくさん歩けないタクールは、

「私は歩くことができない！　馬車に乗らないといけない！」

といって泣いていました。

また、例えばアカンダーナンダジにマッサージを頼んだ時に、アカンダーナンダジは力が強かったので、タクールは

「身体が痛い！　壊れます！」

と言いました。そして撫でるようにマッサージをしてもらった。それくらい身体がソフトでデリケートでした。

タクールが床屋さんに切りそろえてもらっている時に、Mさんがやって来ました。

二度目の訪問にも関わらず、シュリー・ラーマクリシュナはMさんを仲間だと感じていたのでシュリー・ラーマクリシュナはインフォーマルに「ここにおすわり」と言いました。

そしてMさんは床にすわりました。

もしフォーマルな対応をしなければいけないお客様ですと、タクールの散髪が終わるまで外で待ってもらって、それから椅子を出して座ってもらいますね。

フォーマルだったら椅子、インフォーマルだったら床。

もちろん「床にすわってください」と言われてもMさんは気にしませんでした。

「やあ、来たね。けっこうだ。ここにおすわり」と言って、タクールは床屋さんが来ていたにもかかわらず、Mさんを床にすわらせたのです。

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁上段１２～１５

***まだ寒い季節が完全に去ったわけではないので、赤いふちどりをしたモールスキン（表面を起毛した厚地の綿織物）のショールをかけておられた。Mを見ておっしゃった、「やあ、来たね。けっこうだ。ここにおすわり」***

（解説）

ここの部分はベンガル語の「ラーマクリシュナの福音」では、

「身体にショールをかけておられました。足にはスリッパを履いておられました」

という説明があります。日本語ではどうですか？

「ショールは書いてありますが、スリッパは書いてないです」

たぶん英語版を作るときにニキラーナンダジが削除したのですね。たぶんそのためにない。今、分かりました。

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁上段１５～１６

***彼は微笑しておられた。話すときに少しどもられた。***

(解説)

タクールは話をするときに少しどもられましたね。Stammering（どもる）、ベンガル語でトトラといいます。面白いことに、どもる人は詩を朗読したり、演劇をしたりするときにはどもりません。普通の話の時だけですね。会話のときにどもると、ふつう聞き手はそれを邪魔に感じますね。

タクールはほんの少しだけどもりました。少しでしたので、それも甘い感じのとってもsweetなどもりだったので、聞く人の邪魔にならなかった。例えば

ナ、ナ、ナレン　　　ニ、ニ、ニランジャン

そのような感じで、少しだけありました。

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁上段１７～２２

***シュリー・ラーマクリシュナ「どこに住んでいるのか」***

***M「カルカッタに住んでおります。***

***シュリー・ラーマクリシュナ「ここではどこに滞在しているのかね」***

***M「ボラノゴルの姉のところ──イシャン・コビラージの家におります」***

(解説)

「コビラージ」の意味はわかりますか？

『アーユルヴェーダのお医者さん』のことを「コビラージ」と言います。

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁下段１

***シュリ―・ラーマクリシュナ「おお、イシャンのところか」***

(解説)

シュリー・ラーマクリシュナはイシャンを前から知っていました。だからすぐにMさんがどこに滞在しているのかがわかった。

そして「おお、イシャンのところか」と言ったのです。

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁下段１～４

***「さて、ケシャブはいまどんなぐあいかね。彼はたいへん悪かったのだ」***

***M「ほんとうに。私もそのようにききました。しかしいまはよくなっていると思います」***

(解説)

どうしてタクールはMさんがケシャブ・チャンドラ・センのことを知っているかどうかを確認しないで「ケシャブはどうですか」と直接たずねたのですか？

なぜなら、当時ケシャブ・チャンドラ・センはカルカッタだけではなく、他のところでもとても有名でした。だから当然Mさんも知っていると想像しました。そしてたずねました。「ケシャブはいまどんなぐあいかね」

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁５～１１

***シュリー・ラーマクリシュナ「私はに、ケシャブがなおったら青いココナッツと砂糖を供えておまつりするという誓いを立てたのだよ。ときどき、明け方に目をさまして、私は母の前で泣いたものだ、『母よ、どうぞケシャブをもう一度よくしてやってください。もしケシャブがいなかったら、私はカルカッタに行ったときに誰と話をしたらよいのでしょう』と言って。彼女に青いココナッツと砂糖をささげようと決めたのはこういうわけだ。***

(解説)

インドでは、神様にお願いごとをして、

「神様、もし願いを叶えてくださったなら、そのときは○○をお供えします」

と神様に約束します。そして願い事がかなうと、お金、飾り、物などを捧げます。

その中のひとつは**青いココナッツ**です。

これはお金がかかりませんね。

青いココナッツといっしょに砂糖も捧げなければいけません。なぜなら青いココナッツだけを飲みますと、酸味がきつい。げっぷをするときに酸っぱい味が出ます。

私の経験ですと、少しだけ砂糖をたすと、大丈夫です。

どうしてタクールは青いココナッツをケシャブ・チャンドラ・センのために捧げると神様と約束しましたか？

タクールはふつう、神様には何もお願いできなかった。自分のお願いは全然しない。しかしどうしてケシャブ・チャンドラ・センのことをお願いしましたか？

なぜならケシャブ・チャンドラ・センはふつうの人ではないからです。

タクールとケシャブ・チャンドラ・センの関係はふつうの人間の関係ではないです。

**非利己的で霊的な関係でした**。

「もしケシャブがいなかったら、わたしはカルカッタに行ったときに誰と話をしたらよいのでしょう」

その当時はタクールがドッキネッショルに住んだ最初の頃でしたので、直弟子はまだあまりいませんでした。ケシャブ・チャンドラ・センだけ。スワーミージーもバララーム・ボシュも他の信者もみな、もっとあとから来ました。

このときケシャブ・チャンドラ・センは治りましたが、少し後で亡くなりました。

彼がなくなった後、タクールは三日間くらいベッドで寝て泣いて何も話しませんでした。それくらいショックを受けた。それほどケシャブ・チャンドラ・センを愛していました。

タクールとケシャブは外から見ると、意見が全然違いました。

シュリー・ラーマクリシュナはヒンズー教でした。ヒンズー教でしたから、

神様の像を信じ

神様の化身を信じ

グルを礼拝し尊敬していました。

ケシャブ・チャンドラ・センはブラフモーでしたから、

神様の像も神様の化身もグルも信じていませんでした。

例えばシュリー・ラーマクリシュナのchosen deity(選んだ神様)はマザー・カーリーでしたけれども、ケシャブ・チャンドラ・センはマザー・カーリーを信じていませんでした。

なぜなら像には重さと高さがあって有限です。しかしマザー・カーリーは宇宙を創っています。宇宙は無限のようです。だから**「有限のマザー・カーリーが無限のような宇宙を創ったのは非論理的ではないか」**と考えたのです。

また、ケシャブ・チャンドラ・センはヒンズー教の教えの中にはいっぱい**「迷信」**があると考えていました。そしてヒンズー教の中には**「あまり高い聖者はいない」**と考えていました。

それにもかかわらず、シュリー・ラーマクリシュナとケシャブ・チャンドラ・センは仲良しでした。

なぜなら**ケシャブ・チャンドラ・センは神様のことが大好きだった**からです。

ケシャブはマザー・カーリーを信じていなくても、神様を強く信じています。大変信仰があつかったです。神様の像があるかないかは関係ない。ただ神様を強く信じていました。

シュリー・ラーマクリシュナはケシャブのそこが好きでした。

**シュリー・ラーマクリシュナはそれくらい自由主義で普遍的なアイデアを持っていました。**

あとで、シュリー・ラーマクリシュナは何回も説明しました。

ケシャブ、あなたのブラフマンと私のマザー・カーリーは同じです。

あなたはマザー・カーリーの本性を知らないので、とても小さいと思うのです。

例えば太陽は遠くから見ますと小さいですね。まるでお皿のようです。しかし実際の太陽はお皿のように小さくはありません。太陽の近くに行くともっともっと大きくなりますね。マザー・カーリーも、もっともっと近づくと分かる。マザー・カーリーの本性が本当は無限だということが。

あなたの形がない神様のブラフマンと私の形がある神様のカーリーは同じです。なぜなら

**ブラフマンもマザー・カーリーも本性がサッチダーナンダだからです。**

同じブラフマンの二つの姿です。

①姿も形がないブラフマン：ニラーカラ、 性質がないブラフマン：ニルグーナ

 　　　　　　　　　　　　　↕　　　　　　　　　　　　↕

②姿、形があるブラフマン：　サカーラ 　 性質があるブラフマン：サグナ

との違いです。

シュリー・ラーマクリシュナの説明を何度も聞いて、

**ケシャブ・チャンドラ・センはブラフマンとマザー・カーリーが同じだと信じるようになりました。**

シュリー・ラーマクリシュナは論理が上手だからケシャブが信じたのではありません。学者も理論が上手ですがそれとは違います。シュリー・ラーマクリシュナと学者は何が違いますか？

シュリー・ラーマクリシュナは自分で悟りましたから、皆さんはシュリー・ラーマクリシュナの言うことを信じていました。

**悟った人のいうことはとても力強いです。**それだけではなく、

**シュリー・ラーマクリシュナは自由主義でとても普遍的でした。**それが理由です。

ケシャブ・チャンドラ・センは、シュリー・ラーマクリシュナの自由主義と普遍性のアイデアにとても感動しました。

ケシャブ・チャンドラ・センはあとでマザーの歌をつくったほどです。しかしそのマザーはマザー・カーリーではありません。

彼はシュリー・ラーマクリシュナをみて、以前の考えは本当に変化しました。彼は自分の雑誌を出版していたので、雑誌に

**「ヒンズー教の中には『迷信』がいっぱいだと以前は考えていましたが、シュリー・ラーマクリシュナに会ってから私のその考えは間違いだと分かりました」**

と書きました。

・📖 （読む）「師と弟子」　５頁下段１１～６頁上段５

***話してくれ、お前はカルカッタに来ているミスター・クックという人を知っているか。彼が講演をしているというのはほんとうかね。あるときケシャブが私を汽船に乗せたが、このクックという人もいっしょにいた」***

***M「はい、師よ、私もそのようなことをききました。しかし講演をきいたことはござ***

***いません。彼についてはあまり詳しいことは存じません」***

***シュリー・ラーマクリシュナ「プラタープの弟がここに来た。彼は二、三日泊まった。何もすることがないのにここに住みたいと言った。私は、彼が妻と子どもたちを義父のところに置いてきたということを知った。彼は大勢の子供たちを引きつれているのだよ！　だから私は叱ってやった。考えてもごらん、あんなにおおぜいの子供の父親なのだ。近所の人びとがきて彼らを養い育てるとでもいうのかね。彼は他の誰かが自分の妻子を食べさせているということを、彼らが義父の家に置き去りにされているということを恥ずかしいとさえ思っていないのだ。私は彼をきびしく叱り、仕事を探せとすすめた。それで彼も、素直にここを出て行った──お前、結婚しているのか」***

(解説)

シュリー・ラーマクリシュナは放棄が好きでした。

ですけれども義務を果たさずに霊的にはなれません。

結婚している人の一番の義務は「家族の面倒をみる」です。

その義務をしないで霊的にはなれません。別の例も「福音」の中にでています。

そしてシュリー・ラーマクリシュナはいつもたずねていました。

「あなたは結婚していますか、していませんか」

放棄には二つの道があります。

①結婚していない人には、結婚しないほうがいいという助言があります。いつも若い信者にはその助言でしたね。放棄に興味があり、放棄のできる人は放棄してください。お坊さんは、中の放棄と外の放棄の両方が必要です。

②家住者のためには別の助言がありました。

もし結婚をしていて子ども、奥さん、旦那さんがいますと、その面倒をみながら霊的になってください。結婚していて奥さんと子供を奥さんの両親が面倒をみています。それはとても恥ずかしいでしょ。だからあなたはドッキネッショルから出ていってください。そして初めは義務をして、そして霊的なことを考えてください。

どのようにして霊的になりますか？

無執着を実践して。それが中の放棄です。**中の放棄の意味は無執着です**。

しかしそれはとても難しい。執着をしないでお世話をするのはとても難しいです。

我々がするお世話はいつも、執着と一緒です。つまり、執着がなければお世話はしない。ふつうはそれです。ではどのように執着なしにお世話をしますか？

霊的にならないとできないですね。神様を愛しますとそれができる。たとえば、

愛した人の中にもっともっと神様を見る。そうすると出来ます。

しかし家族や愛した人の中だけに神様を見たいと思ってもそれは無理です。神様を見たいなら

**すべての人の中に神様を見ようとしなければなりません。**そうしますと、

**霊的になって普遍的な愛が出ます。**

あるときブテーシャーナンダジがお母さんに聞きました。

「お母さん、私のことを愛していますか」

『はい、愛しています』

「ほかの人の息子も愛していますか」

『はい、他の人の息子も愛しています』

「本当ですか？　他の人の息子を私と同じように愛していますか」

『他の人の息子も愛していますが、あなたへの愛、そこまでではありません』

これが問題です。親しい関係だからお世話をする。いつも面倒をみる。それは必要なことです。

しかし**愛は普遍的です**。

全ての人の中に神様、そのことを考えてチャンスがあれば他の人のお世話をします。普通の義務は自分の家族のお世話をする。しかし霊的な見方ではそうではありません。

「福音」の中にもあります。自分の家族に対してだけ愛、自分の宗教の信者のためだけに愛、自分の国の人のためだけに愛、それは狭い愛です。

**本当の愛は、すべての人、すべての国、すべての宗教の人、すべての国の人に対して。**

**それが本当の純粋な愛です。**「福音」の中にあります。マーヤーとダヤー(慈悲心)。そのマーヤーは「幻」と言う意味ではなく別な意味です。マーヤーは「狭い愛」という意味です。

オーム　シャンティ　シャンティ　シャンティ　　　ハリ　オーム

シュリー・ラーマクリシュナ　ラパナマストゥ

（『福音』勉強会第26回　以上）